

陽は傾き、あたりには夕食の煮炊きの匂いが漂っている。午前中まで雨が降っていたせいか、そこかしこに見える木々や草花の葉っぱは濃い緑色をしていて、もう気温もだいぶん下がったというのに、いまだにむつとする草いきれを放っていた。

この数日、蟲の襲来はない。名もなき開拓村に、人狼エク・アル・カーがたどり着いたのは、その数日前、ここを最後に蟲たちが襲っていたまさにその時のことだった。もし、エクがあそこで、相手を無力化する謡を蟲に聞かせていなければ、果たしてこの村はどうなっていただろう。

そんなわけで、エクはその異質な容貌——なんとといっても、とがった鼻面にぴんと立った三角の耳、そして身体全体を覆う長い灰色の剛毛などという人間には、そうはお目にかかれなかった——にもかかわらず、その村の賓客としてもてなされることになったのだった。

とはいえ、エクが吟遊詩人でもあることを知ると、たちまち娯楽の少ない村人たちは、その周囲に群がり、なんでもいいからと歌や物語をねだるようになっていた。

「ねえねえ、それで、王様はどうなったの？」

その日も、いつもとおなじ調子だった。午後のひとときをエクの謡で過ごした子供たちは、何度そろそろ帰らねばと促しても、いつこうに聞く耳を持たなかった。

そうこうするうちに、子供たちを呼びに来た大人も加わって、エクの周囲には大きな人の輪ができあがっていた。

ふうつとため息をひとつつき、物語に目を輝かせる人々を見回して、エクは彼らにはそれとわからない苦笑いをもらした。とはいえ、人々が自分ごときの物語でも必要としてくれるのは、けっして悪い気分のものでもないか、と、エクは心の中でつぶやいた。

こほん、と咳払いをし、エクは六弦琴をかき鳴らした。物語の続きを始める。

「教都の戦いの後、教都前の戦場を離れ、ひとり、シヨク・ワン王は、ル・タンが姿を消した場所へと向かいました。正確な場所がどこなのかはすぐにわかりました。巨大なぶよぶよのル・タンは、べつたりとした粘液のような痕跡を、そこかしこに残していたからです。それは、おぞましい灰色の汚物でしたが、時間が過ぎるにつれ、次第に小さくなっていました――」

その一 『顛末』

シヨク・ワンがカイアンパクを降り立っても、件の霊体でできている灰色のどろどろしたものの以外、なにも見つからなかった。もちろん、ル・タンの死体も見当たらない。

あたりを覆っていた巨大な岩盤はこなごなに砕け、地形は見る影も無く変わり果てていた。恐ろしいことに、さらに東に何リーか行った先にある小山は、完全に姿を消している。

無我夢中だったとはいえ、シヨク・ワンは思わず背筋を震わせた。よくあの恐ろしい緊張に耐えられたものだった。一歩間違えれば、あの山を消滅させた力が、頭上から降ってきていたのだ。意識して想像しないようにしていたが、いまになってみれば足が震える。

「まったく……本当にあんなことがあったのか。ついでしたがたのことなのに、とても現実にあつたとは思えないな」

「だが、それはまぎれもない現実だよ」

シヨク・ワンは反射的に身構えた。ほとんど姿勢は変えなかったものの、腰の剣に手をかけ、目だけを動かして声の響いてきた方向を見る。

そこにいたのは、足首のあたり近くまで伸びた、長く黒い髪の毛の男だった。胴着を身に付けている以外、上半身は裸に等しく、下半身は薄い革の裾着を着けている。男の名はボウ・ア・ロアオ。だが、シヨク・ワンはその男の姿や名を知らなかった。

「何者だ？」

誰何するシヨク・ワンに、ボウは笑った。

「気にするな、おまえとやり合うつもりはないよ」

シヨク・ワンはなおもじつとボウの顔を見つめていたが、ふつと警戒を解いた。

「おいおい、いいのかい？ 口でいくらやる気がないってつたつて、油断したところを狙つてるのかも知れないんだぜ」

「それならその時さ。ただ、おまえにはその気はない。そうだろう？」

ボウは天を仰いだ。

「やれやれ、こんなのが〈王〉だつてのかい」

「その呼び名はやめてくれないか」

うんざりした声でシヨク・ワンが返した。

「いま、猛烈に後悔しているところだね」

「そりゃあなによりだ。すこしは溜飲が下がるつてもものだよ……ま、少なくとも、あの教王よ

りはよっぽどいい」

「いままでにあつたことが、すべて現実だと言つたな？」

シヨク・ワンの言葉に、ボウは深くうなずいた。

「そうとも。黒い精霊も、ル・タンとそのなれの果ても、獣機も、そして教王も、全部現実だ

つたさ。でなけりゃ、死んだ仲間たちが浮かばれない」

「死んだのか？」

ボウは歯を見せて苦笑した。

「ああ、死んだね。これ以上ないくらいにみんな死んじまつた」

「それは気の毒だつたな」

「それは言うな。おまえに言われると、おれはどうすればいいのかわからなくなってしまう。」

おれはおまえの敵だった。まあ、雇われただけだが。それでも、おまえたちの命を狙って動き回っていたのは事実だ。なにより、あの銀髪の娘をさらったのは、仲間の仕業だったんだ」

シヨク・ワンの目に、刹那険しい光が浮かんだ。だが、すぐにそれはやわらぎ、シヨク・ワンは、相手からうつむくように目をそらした。

「だがアリーは無事だ。結果的だろうと、どうだろうと。だから、わたしにもおまえやおまえの死んだ仲間を憎む気は起きない」

「……そりゃ、ありがたいこつた」

ボウはあきれたように吐き捨てた。

「ちくしょう、残りの人生をかけて、おまえをいつか殺してやると思っていたのに、すっかり拍子抜けしちゃった」

「それは助かるな。毎日背中を気にして生きるのは性に合わない」

ボウは鼻を鳴らした。

「あんな目にあわなけりゃ、出会ってすぐにでも殺してやりたいところだったんだがね」

「あんな目？」

クイー・オ・ロー

「御仁と九尾獣、それに得体のしれない龍に似た化物が目の前でくんずほぐれつしてりゃあ、すこしは神経質になるってもんさ」

シヨク・ワンは、眉をひそめて聞き返した。

「御仁、だつて？ 九尾獣と龍モドキまでいたと？」

「そうさ。頭に何本も角を生やした巨人に、別の呼び名がないならな。あるいは、金色に輝く何十本の尾を持つ巨獣が、目の錯覚でなかったなら」

「龍モドキというのは？」

ボウは小さく首をかしげた。

「そう見えたからそう言っただけだ。あんなものは話にも聞いたことはないが、とにかく、そいつと御仁、九尾獣が戦っていたのさ」

「戦っていただつて？」

「さもなきやじゃれあつていたかだな。なにしろ、ああいった手合にとつちや、じゃれあいで地面を引き裂くことなんか茶飯事かも知れないからな」

シヨク・ワンは考え込んだ。

「なんとも引つかかる話だが……」

「心配はないさ。どうやら全部片はついたようだからな。龍モドキは、ル・タンを引きずり込みながら地面に沈んでいったし、残りの二匹はどつかへ行つちまった」

シヨク・ワンは、鋭くボウの顔を見た。

「ル・タンだつて？」

ボウは目を閉じ、両手を持ち上げて大きくうなずいた。

「ああ、そうさ。おれがどうしてこんな場所にいると思う？　もし、ル・タンがまだここにいたら、ぶち殺してやろうと思つていたからさ」

「あの男の異常な力に気づかなかつたか？　最悪、逆に取り込まれていたかも知れないんだぞ」

「そんなこと、気を探ればわかるさ。すくなくとも、あの男は力を失つていた。そう判断したからここに来たんでね。いずれにしろ、おまえの知つたことじゃあるまい？」

「まあ、言われればそうだな」

肩をすくめるシヨク・ワンに、ボウは片眉を上げ、ゆつくりと歩き始めた。

「行くのか？」

「ああ。もう、ここには用がない」

シヨク・ワンは、じつとその背中を見送つていたが、遠ざかるボウに向かって、意を決して声をかけた。

「教会に、手を貸すつもりはないか？」

ボウは立ち止まり、顔をしかめてシヨク・ワンを見返した。

「なんだつて？」

「聖刻教会は、いま存立の危機に瀕している。おまえほどの男の与力があれば、キサソ下やコシワクたちも大きな助けを得られるだろう」

ボウは、穴が開くほどに、じつとシヨク・ワンの顔を見つめた。

「正気で言ってるのか？　このおれを？　ル・タンの手先だったこのおれが？　わかっているのか、おれはあのナラス・バラスを従えていた人間だぞ？」

「だが、おまえはナラスではない。すくなくとも、あの男から感じた邪悪さと、おまえの持っているものは違うように思える」

「何の根拠があつて？」

シヨク・ワンは答えに窮した。だが、こういったときの自分の感覚を、誰よりも信頼している自分があつた。

「根拠はない」

ボウは、しばらくの間ぽかんと口を開いたまま立っていたが、やおら身体を折って、大笑いをはじめた。

「こりや傑作だ。法王を暗殺しかねない人間を、理由もなしにその内懐に招き入れようだと？　それとも、おまえ、教会になにか含むところでもあるのか？」

シヨク・ワンはむつとした表情を浮かべ、そらした胸を拳で叩いた。

「ばかな。無論、おまえがなにかよからぬことをしようとするれば、全力で阻止するつもりだ。

このわたしが」

だが、ボウはますます笑い転げた。

「なにを言い出すかと思えば……なるほどなるほど、これが、これから東方を率いて行く人間



か。見ている分には、退屈しないで済みそうではあるな」

「なんのことだ？」

「げげんにたずね返すシヨク・ワンに、ボウはあきれたように眉をひそめた。

「おまえ、さつき大声で名乗ったろう。自分が梗醍果の王だって」

「ああ……聞いていたのか、あれを？」

「当たり前だろう。この戦最大の見せ場だったんだからな。いや、なかなかあれは時宜を得た宣言だったか」

シヨク・ワンは、持ち上げた右手を額に当て、きまり悪げに天を仰いだ。

「そのことは忘れてくれ」

「忘れろだと？」

ボウはきよとなつた。

「おまえ、本気で言ってるのか？　いったん発せられた言葉に取り消しはきかないことを、まさか知らないとは言わせないぞ」

「わたしはからかわれているんだ。だってそうではないか？　梗醍果の王なんて、他の王たちにしてみれば、何の益もない存在だ。上に押し戴くつもりもないくせに、わたしの発言を逆手にとつて、物笑いにするタネにしているんだ。絶対にそうに違いない」

シヨク・ワンはうつむくと、しかめた顔でぶつぶつと愚痴り始めた。

「梗醒果の王がどうしたと言ったって、どうせこのことが片づけば全部うやむやさ。もちろん、わたしもそれを望んでいるんだが……」

「いいか、ひとつだけ教えておいてやろう」

苦笑しながら、ボウはシヨク・ワンの言葉を遮った。

「ジョウキにせよ、ガイコにせよ、やつらの望みは一番偉い人間になることじゃあない。一番権力のある人間になることさ」

「なに？」

「一番偉い人間なんざ、何のうまみもありやしない。責任を全部押し付けられるだけでな。ところが、いま、連中の目の前に、この世で一番偉いと名乗った人間が出てきたわけだ。やつらが責任を押しつけるのに、これ以上の存在はいないような気がするんだが、どうだ？」

シヨク・ワンは顔を引きつらせながら、思わず伽式恒の方角を振り返った。

にやにや笑いを浮かべて、ボウは続けた。

「ま、おまえを見ていると飽きが来ないのは確かだな」

シヨク・ワンは、動揺を浮かべた顔のまま相手に向き直った。

「で、では——」

ボウは不意に真顔に戻って、シヨク・ワンをまっすぐ見返した。

「だが断る」

ボウの姿が突然膨張したように見えた。刹那、残像を残して、シヨク・ワンの目の前からボウの姿は消え去っていた。

その場に取り残されたシヨク・ワンは、不安げな表情を浮かべ、途方に暮れるのだった。

東方の諸侯たちによる会議は、それからしばらくの後再開された。その顛末については、いまさら語るまでもないだろう。ただ、磨宣条紀王によつて引導を渡されるその瞬間まで、シヨク・ワン自身は、最後までボウの言葉を本気にはしていなかったようだ。

シヨク・ワンが、教会の設立した諜報機関に、異様に髪の毛の長い瘦躯の男が加わったことを知ったのは、それから数年の後のことだった。

その人物は、諜報機関の長、隻腕のジゲン・ノコウと、その有能なる片腕であり、颯雷刀首ふうらいとう

チヨウレイシヨウキ

位継承者でもある澄伶成伎とともに、〈マーク〉なる暗殺組織からシヨク・ワンの危機を救うことになるのであるが、それはまた後の出来事である。